

平成23年度
新規採用職員・知事講話研修
「鳥取県庁での旅立ち」

11月7日(月) 於: 県庁講堂

(平井知事) 今日は皆さんと一緒に5時まで、就業時間まで、これからの新しい鳥取県政の方向性だとか、それから職員としてこの鳥取県庁に入られたわけなんです、皆さんにこれから是非実行していただきたいこと、そんなことでメッセージをお話できればありがたいなというふうに思います。今日は皆さん、それぞれの職場に散って出て行かれて、だいたい半年ちょっとが経ったと思います。それぞれ、いろんな印象を持たれたかなと思いますが、鳥取県庁のほうに入って門戸をたたいて来られたわけでございますけれども、どのような状況かなというふうに思います。

(平井知事) それでは、ちょっと最初交流として、皆さんの県庁に入った率直な印象、それを語ってほしいなと思いますし、併せて是非お話いただきたいと思うのは、県庁に入って、県という組織の中あるいは関連の組織の中に入られて、どういうことを自分としてはやっていきたいか、どんな志で入ったのか、そのへん2点、お話をいただければなというふうに思います。2~3人、じゃあせっかくですけえ、お話をいただきましょうか。どうせなら遠くから来た人がいいですな。米子児相の堀江さん、いらっしゃいますか。はい。良いお返事でした。

(堀江児相) まず、心置きからですね。私、鳥取県に入るまでは宮崎とか北海道とかいろいろな所の児童福祉施設の職員をしていたのですが、地元に戻りたいということと、やっぱり自分は児童福祉の道で貢献していきたいという思いがありまして、鳥取県のほうを受けさせていただきました。それから、今どう感じているかということですが、とにかく児童相談所というところはケースが多くて、非常に忙しいです。一つひとつ丁寧なケースワークを行っていきたくはありますが、それもなかなか時間の問題、かなり許される状況にないという現状がありまして、そこは非常に今一番苦しんでいるところであります。以上です。

(平井知事) はい、ありがとうございます。それでは、東部総合の北岡さん、いらっしゃいますか。

(北岡技師) はい。私も、これまで民間企業でちょっと経験がありまして、勤務経験がありまして、それでこの春から鳥取県庁に入らせていただきました。私も先ほどの方と同じように県外にずっと出ていまして、一番がやっぱり鳥取県に戻ってきたいなという思いで、この春から働かさせていただいております。そうですね、今半年経って正直なところ、これまで勤務経験はあるんですけども、やっぱり県の仕事というのは、公共の福祉、県民の皆様のために働いているということで、やっぱり民間とはかなり違うなという印象を持ちました。正直なところ、慣れるのに精一杯で、最近ようやく慣れて仕事がようやく少しずつできるようになってきたかなというふうな感想を持っています。ですので、早く皆さんと一緒に仕事ができるようになりたいと今でも考えているところです。

(平井知事) はい、ありがとうございます。それでは、財源確保推進課の川本さん、いらっしゃいますか。

(川本主事) 私は、県に入る前に銀行で働いていたんですけども、今財源確保推進課の債権管理担当ということで、県全体の未収金の回収の業務に携わっておりますが、まずはじめに、こんなに税外の未収金を回収する体制というのが整っていないということに大変驚きました。他の県等でも、債権放棄に関する条例とかっていうのを整えているところは本当に少ないのですけれども、まずはこの自分に与えられた仕事を、鳥取の債権回収の整理整頓をしていきたいなと思っております。それが私の入った感想と目標です。以上です。

(平井知事) はい、ありがとうございます。3名の方のいろんなご意見出たところであります。いろんな事情で、結構意外ですね。今日はたまたまそうかもしれませんが、他の経験を積まれて県庁のほうに来られた方が多かったようでございますけれども、故郷が鳥取なので、今までよその県で働いてきたけれ

ども、鳥取で是非役に立ちたいというような志で帰って来られた。あるいは県庁の中のいろんな財源の総ざらいといいますか、整理をしなきゃいかんなどというように思えておられるとか、そういうなお話がございました。また、県庁の仕事だとか、組織に早く慣れていかなきゃいけないという率直な感想も聞かれたわけでありまして。皆さん、それぞれの思いでこの鳥取県の門戸をたたいて、いろんな組織のほうに今配属をされたんだと思います。「青雲之志」という言葉があります。最近流行りのドラマでいえば、「坂の上の雲」というような言葉もございます。坂の上の雲をつかむかのように、自分自身の自己実現を図っていく。また地域を立て直して、あるいはこの国というか日本の役に立っていく。そんな思いを抱いて、それぞれに難しい試験なんかをくぐり抜けて、鳥取県のほうに入られたわけだと思います。その新鮮な思いというのは、一生を通じて大切にしなければいけないと思うんです。それだけ素晴らしい人材が集まっていると私は思っております。今のお話聞いてみましても、半年ちょっと経たれたぐらいですが、自分自身をすごく冷静に見ておられる様子がよく伝わってきますし、職場の中の問題点に対しても、一年生とよく言われますが、一年生ではかなり良いような、そういう率直な提言も聞かれました。是非、その思いを大切にしてもらいたいなと思います。実は私自身もこうした公務の世界に入りましたのは、ボランティアの活動からだったんですね。学生の頃にボランティア活動をして、障がい者の方のお役に立とうとか、あるいは法律という問題がございまして、無料の法律相談をやったりして、社会の中のお役に立つ。別に報酬をもらうわけじゃありませんが、そんなことから自分の学生生活は始まったわけでありまして。そういう中で別に大儲けしようとは思わないけれども、ただ自分が生きてきた証として、何か地域の中で、あるいはこの国の中で役に立ちたいという、そういう漠然とした思いを強くしました。今日の皆さんの話を聞いても、そうしたところに通じるところがあると思います。公務員を目指すというのは、得てしてそういうことでございまして、何か大儲けをしてやろうということではなくて、むしろ自分自身、どこかで役立ち感を覚えたい、そんな思いが強いんじゃないかと思うのです。それは、県庁という組織文化の職場の良いところであると私は思うのです。だから皆さんには是非、「初心を忘れるべからず」といいますが、その初心を大切にしていきたいなと思います。この「初心を忘れるべからず」というのは、観阿弥・世阿弥の能の言葉なわけでございますけども、初心には3つあるということですね。若いときの初心、本当に始まるときの初心ですね。それから芸を大成していくときの初心、それと老いてなお初心という、その3つの段階があるというわけでありまして。そういう、それぞれの人生の段階があるわけでありまして、それぞれの時に大切にしなければならぬ直感といいますか、一番基本となること、それを追いつけていくということではないかなというふうに考えています。皆さんのほうに、お手元にレジュメをお配りしておりますので、だいたいこのような話をということでお持ちをしたわけでありまして、私は県民の皆さんのための県職員という基本があるものと思っています。パートナー県政を目指したいと思っています。鳥取県は、それができやすい環境にある。58万人という小さな県です。日本一小さな県。だからこそ対話ができるだろうと思います。また住民の皆さんが、県庁の中に入り込んで一緒になって仕事をしやすい環境だと思っております。県議会のというような場もございましたね。皆さんもいろんな形でこれから生涯をかけて、そういう議会の皆さんとのお付き合いもあるかと思いますが、彼らも選ばれた選良として、選挙を経てやってきているわけですよ。それぞれに見識もあります。そうした議会の議員を通じて県民の皆さんとつながっていく、そのチャンスは鳥取県は非常に多くある。全国で一番、東京都よりも、大阪よりもずっとあるということだと思っております。中には、橋下大阪府知事(前の知事)さんのように、「鳥取県なんか、あそこ人口60万でしょう。県議会議員なんか6人で良いんですよ。鳥取県なんか」とかおっしゃってました。こういう言葉づかいが乱暴だったので、だいぶ議論になりました。私も対抗措置を取らせていただいて、大論争になったんですけども、時々こういうのがありますよね。前、鳥取県で、少し出っ張ったことをいろいろやったら、そしたら東京都と喧嘩したときなんですよけれども、東京のほうからは、「鳥取県のくせに生意気だ」とか、こんなメールが来たりしましてね。「くせに」とはどういうことだと、こう思うわけでございますが、それは横に置きまして、そういう対話を取りやすいというのは、我々の良いところだと思っております。だから全国で一番良い県政をやろうと思ったらできる。それがパートナー県政という目標を立て得るということだと思っております。

いるんです。透明度でいきますと、お陰様でここ4年ぐらい急速に透明度アップしてきました。昨年度は、ようやく全国一の透明度の県庁になったんです。予算編成過程だとか、あるいは日頃の情報公開、そうしたところでナンバーワンのポイントになりました。だからこそ、県民の皆様にも赤裸々に私たちの県政の内容を見てもらえんと思います。県の取材している記者さんの話でもよく言われるんですね。「鳥取県ほど取材のしやすい県はない」というふうに言います。それで良いと私は思っているんです。ただ、県庁というか役所の文化というのは、割と閉鎖的なところがございましてね。そういうものから意識的に脱却していかなきゃいけないんだというふうに思うんです。そうして情報をオープンにして、いろんなご意見を持った県民の皆さんに参画をしてもらって、こういうふうにしたら良いよってということ、なさろうと思うことはどんどん取り入れて行く。そうやっていきますと、結構スピード感のある行政に変わってきますよね。これができるかどうか、鳥取県の勝負だと思っているんです。それから従来型でいきますと、「お役所仕事」ということが言われます。非常に硬直的で、内向きな仕事をする。何だかんだと一杯書類を出させる。そういうことで意図は分かっております。先般も東京電力が賠償しなければいけないという段になりましたら、賠償をする相手方の、被災者の方々にこんなに分厚い資料を作って出さないと賠償しませんよということをして、非常に社会的問題になりました。あれは「他山の石」であります。私たちが似たようなことあるのですよね。住民の皆さんから見ると、あるいは企業の皆さんから見ると、「なんだいや、この書類はこんなにたくさん書類を書かされるのか。しち面倒くさいところだなあ」ということをいろいろと言われるわけですよね。だから私たちも、胸に手を置いて、もっともっと使いやすい県庁、議論しやすい県庁に変わっていかなければいけないということだと思っております。また、「お役所仕事」と言われるのは、法律がどうなるとか、規則がどうなってる。実はこれについては予算要求がどうなるか分かりませんので「今は何にも言えません」。胸を張って、「何にも言えません」、言ったりするんですね。これって、住民の皆さんから見ると、あいつは本当に自分の頭でものを考えているんだらうかというふうに思うわけです。信頼感が欠けてくるわけですよね。そうじゃなくて、私たちは一人の人間として、立派な県職員として堂々と議論をして、そして「良い」と思うことは、周りの人を説得してでもやっていく。そういうのが本当の仕事のやり方じゃないかなと思います。そうやって、どんどんと輪を広げていくことで、デモクラシーというものができてくるわけですよね。ジェームズ・ブライスはこういうように言っているわけでありまして。「地方自治は民主主義の最良の学校であり、保証人である」というふうに言っているんです。これの言葉に象徴されますように、デモクラシーというのは地方自治の現場から育ってくるし、発展してくるわけです。私たちはその最前線にいるわけですから、是非そのことをしっかりと頭に入れて、職員、そして働いていきたいと思っております。また、よく「頭でっかちなね、県庁は」ということも言われますよね。そのイメージは、要は頭の中で考えてる。理論ばかり言って、いわば「こうじくなやっちゃ」と、こういうことでございまして、ちょっと小生意気で小賢しい、そんなようなイメージでよく見られます。そういうことも、やはり我々としては反省しなきゃいけないことであると思っておりますよね。私たちは確かにしっかりと、いわゆる勉強をしなきゃいけない。例えば橋を架けようと思ったら、その橋を架げるために、こういうような強度が必要だとか、こういうような材料がいいだとか、こういうような水との関係でいったら、周りの地形でいったらこんなことが必要だとか、そんなことを頭に入れて、しっかりと勉強をしなきゃいけません。例えば福祉であれば、障がい者の皆さんの特性に応じて、このようなケアをしなきゃいけない。高齢者の方々の社会心理状況だとか、そんなことも理解をしなきゃいけない。教育の現場であれば、子どもたちについて、こういうような子どもたちの言葉があれば、こんなように接していかなきゃいけない。そういう、いろんな専門的な知識や経験というのは、絶対積まなきゃいけません。それが我々の使命だと思っております。

ただ、その分かったことを、大上段で振りかざして議論しているだけでは、皆さんついてこないですよ。そういうようなことであると思っております。実は私も最初に役所に入りまして、この鳥取県庁じゃないんですけど、別の県庁に最初お世話になりまして、その県庁で上司の係長の方が「平井ちゃん、平井ちゃん」とこう呼びまして、最初に薫陶を受けるわけでもございまして、「まあ、まあ、そこに座れや」と、「平井ちゃんなあ、あんた東京大学出て頭がええかもしれん。しかし、そんなことみんな分かるとる。平井ちゃんは、

だからそういう意味で切れ味の良い仕事をするだろうけれども、ただ、道の中をもし歩いている人がおると考えてみてごらん。その時にカミソリをまち中で振りかざしていたら、みんなどうする。みんな逃げて行くでしょう。そうではなくて、カミソリいうもんはな、鉛筆を削るときなんかに出せばええんや。それまではポケットの中にしまって、見えんようにしとこうっちゃ、こういうようにおっしゃったんですよね。最初その意味がよく分からなかったんですけども、だんだんと年を経て意味がよく分かるようになりました。まず、その相手と人間同士の付き合いをちゃんとしなきゃいけない。相手の心をつかむということが必要なんですよね。いつも難しいことだとか、こういう本読んだけどこんなこと書いてあったわとか、そんなことばかり言っていると、どうも人間として愛されないということあると思うんですね。そんなことよりもむしろ、「自分はいないだ彼女にこんなこと言われてしまって、えらい落ち込んでいます」みたいなことを言うと、そうすると「可愛いやっちゃ。ちょっとわしが少し知恵つけたらかいな」、こんなことで寄ってきたりね。そのようなもんですよね、人間というのは。そうやって、人と人の付き合いというのを大切にしたり、それから何より大切なのは、やって見せること。みんなが嫌だと思って、あるいはよく鳥取県ではありがちなことですが、これは難しいと思うと遠巻きにして見ている。それだけでいっこうに前に進まないというときに、その渦中に入って行って、「とにかく私がやってみる、汗かいてみる」ということをやることですよ。そうして初めて人間というのは、社会の中で、組織の中で評価されてくるものだと思います。そういう意味で、単に理論だけを振りかざす、理論は大切です。それはしっかり勉強しなきゃいけないし、我々こそがシンクタンクにならなきゃいけませんけれども、それだけではなくて、私たちはシンクタンクからとび出て、行動することも求められている。その実践を是非若い皆さんにやっていただきたいと思うわけでありませぬ。役所に入りまして皆さんの机に座られて、最初に見せられたのは先輩が営々として作られたファイルだったと思います。去年は何月何日にこういう決算がありましたよ。何日になるとこんなことをやりましたよ。そういうのが長年にわたってこう積み重ねられていまして、「まず、これ読んどけえや」ちゃんもんで読まれたんじゃないかと思ひます。そうやって前の年、前の年のことをいろいろ勉強して自分の仕事に活かしていくということは非常に大切な第一歩だと思います。ただ、前の年にやったからといってそれと同じことをやる。その前の年も、その前の年も、みんな毎年毎年先輩から営々として同じことだけやっていく。それって人間の組織でしょうかね。先例主義というのですけれども、こういうのが役所の中に、これは国の役所もそう、市町村の役所もそう、私たち県庁の中でも蔓延してゐるんです。ただ、先例だけに捉われていたらどうなるか。世の中が一步も進歩しませんよね。むしろ、いろんな人たちの考えを聞いて、自分のやっている業務について、未来、これからはこんなことをしなきゃいけないなということを見つめて考えていきたいものです。そのためには、前の年の人はこういうのをやったけれども、私はこういうふうにしなきゃいけないと思う。そして今ある仕事のやり方を改善をしていく、改革をしてイノベーションを図っていく、それが大切な視点ではないかなというふうに思ひます。皆さんは県職員としてスタートされたわけですが、組織の中で生きるということを学んでいるところだと思います。今まで学生だった方は割と自由な中におられたと思います。組織の中に入りまして、しかも社会的な責任というのを持たされますから、いろいろと重苦しいなと思うこともいろいろあるかもしれません。その組織の中で生きていくということ、それもこれは変わらなければならない時代に差し掛かっているだろうと思ひます。長年にわたって、さっきの「お役所仕事」の話になりますけれども、役所、行政というのは一番効率的なのは官僚組織だと言われていました。ビューロクラシーということですよ。そのビューロというの、これはもともと部屋という意味です。その部屋の預かるもの、そういう組織として発達してきたのが官僚組織でございます。この官僚組織というのはマックス・ヴェーバーが体系立ててやってきたわけでありませぬけれども、凄く効率的でひとつの一貫した論理で作られ得るわけでありませぬ。官僚組織、ビューロクラシーの特徴には、いくつかの特徴があります。一つには分業ということがございまして、これはテーラーシステムというふうにも言われますけれども、例えば自動車の製造工場を考えていただければ、流れ工程でそれぞれの人はそれぞれの役割を持ってやっている。ただ、そこに自分の仕事だけを一生懸命やるということですよ。そういう分業ということが、ひとつの組織論理であるわけでありませぬ。

それから2つ目にはピラミッドを作るわけですね。命令の連鎖、チェーン・オブ・コマンドというのですけれども、命令の連鎖のピラミッドを作る。ハイエラキーになります。上から下へと命令をする、下から上へと報告をするという、これをずっと作って、部があつたり課があつたり係があつたりと、こういう体系だったピラミッド組織を作る。それで、号令一下「右を向け」と言いますと、これがずっと下へとつながっていくわけでありまして、段々とそれが末端へと広がっていく。だから瞬時にして、とっても効率よく情報が伝達をされて命令が行きわたる。これが官僚組織の特性であります。さらにフォーマライゼーション、公式化というわけですが、全ての仕事を非人格的な、誰がやっても良いように、そういうパターンにしてしまう。ルールに決めてしまうのです。この手順を踏んだら次はこの手順、この手順を踏んだらこうやりなさい。こういうのを決めてありまして、そういうフォーマライゼーションと言われるような定式化、公式化ということをする。その他にもいくつかのポイントがありますが、こうした原則の基に官僚制と言われるビューロクラシーという組織は構想され、作られているわけでありまして。これは確かに非常に効率的に動くときは動くわけでありまして、段々と問題が出てくるわけですね。それは、例えば縦には良くつながるのであるけれども、横にはつながりにくい。隣の所属であっても、いつか上にあがって下に降りてこないといけません。従いまして2回のコミュニケーションが必要になる。でも皆さん、冷静に考えてみたら、「こんなのは直接話をすればいいじゃないですか」と思うでしょ。そういうように官僚制にはやっぱり盲点があるのですよね。よく「縦割り」ということを言われます。自分の組織の中のこと、仕事のことを一生懸命考えるけども、横で何をやっているか分からない。だから農林の関係でも、商工の関係でも、福祉の関係でも、皆それぞれにやっているけれども、実は全く同じ事業をやっていたりする。こういうことが得てしてあります。今でもあります。そういうようなことを打破していかなきゃいけないのですよね。無駄を省いたり、また早く効率的にまわさなきゃいけないようになるわけでありまして。組織自体が変わってくるわけですね。今では皆さんお手元にも全部配置をされていますけれども、鳥取県はパソコンを全職員に割り当てて、全部LANでつながっているわけですね。こうやってLANでつながっていますから、賢明な皆さんはよく分かると思いますけれども、やろうと思ったら全職員に、あなたは一瞬にして情報を流すことができるわけですね。かつてビューロクラシーの官僚制を作ったときは口伝で伝えていく、あるいは文章で伝えていくという前提でありますから、そんなことは考えにも及ばなかったのですけれども、今はもっとコミュニケーションを取ろうと思ったらインテリジェントにコミュニケーションを取ることができるようになってきました。また、意思決定の目的も、単に行政としてこれを決める、そういう決定だとか、あるいは恩恵を施すだとか、そういうことではなくなってきました。段々と住民に対するサービスのソフトな要素がもの凄く増えてきているわけです。今日もこうして皆さんの名簿を拝見していると、福祉関係の採用だとか、衛生関係のそうした方々が非常に増えていますよね、行政なんかも含めまして。どちらかという行政って、いかにも行政的な法律だとかそうしたことを扱うという人たちよりも、それ以外の人たちがどんどん組織の中で増えてきているわけです。そうすると自ずから単に意思決定のために作ったような官僚制の組織ではない、サービス提供型の組織へと変わっていかなくちゃいけないということも出てくるわけです。このようにどんどん組織自体が変わってきているということについていかなくちゃいけません。就中、我々は県庁だけが存在する社会ではなくて、県庁以外が大切です。県民の皆さんの中に1つの島として県庁という組織があるわけでありまして、外とつながっていくことをもっともっと考えなければいけない。こういうような歴史の要請が始まっているのだと思うのです。

組織は非常に誤ることもあるのですよね。1つ例を挙げて申し上げれば、「3人寄れば文殊の知恵」といいます。あれって正しいと思われませんか。「3人寄れば文殊の知恵」、これは実験した人がいるのですよね。実験をしまして何人かで話し合っただけで答えを出す。そうすると一人一人の能力、一人一人の判断と比較してどうかということです。全員を普通にテストします。一人一人ですべてのテストをします。そうすると当然点数の高い人、低い人が出てきますよね。そういうものだと思います。それに対して何人かのグループで話し合っただけで結論を出すようにしますとどうなるか。そうすると確かに「3人寄れば文殊の知恵」という言葉もある程度合っているのですけれども、平均点よりもちょっと上にいくのです、みんなで話し合っただけで答えを出し

たほうが。しかし、一番良い人がいますよね。組織の中には、実はこれが得意だという人、あれが得意だという人、いろんな人材がいるんですよ。だから一番良いパフォーマンスというのはどういうことかという、それぞれの一番良い才能がそれぞれに発揮をされて、一番高見を目指すことでしょう。そう思います。それが「3人寄れば文殊の知恵」というイメージで僕らは思っているのですけれども、違うのですよね。そこにいかないのです。それよりもずっと下の、平均プラスアルファぐらいのところになるのです。社会というのはこういうものでありまして、組織というのはこういうものなのです。ですから、やっぱり、とにかく組織の中で話あえば良い答えになるとも限らない。だから信念を持って本当に大切なことを、とことん追求していく。それで、やるべきことを的確にこなしていくという、そういうモチベーションが本当に大切なんですよ。よく失敗する原因としていわれるのは、グループシンク・シンドロームといわれる例でございます。集団思考シンドロームということでございます。これはアーウィン・ジャニスが唱えた理論なのですが、これは集団で話し合うと、ときに別の論理が勝ってしまって、本当に正しい答えにいきつかないということを言っているのです。例えば、アメリカでベトナム戦争がありまして、あれがなかなか終わらなかった。実は政権の中核のところの、当時のホワイトハウスには非常にこの戦争は続ける値打ちがないという情報が集まっていたのですけれども、それでも答えが出なかった。なぜかということ进行分析したときに、集団志向シンドロームという理論が導き出されたのですけれども、結局チームの輪、仲間うちの輪、そういう本当に目指すべきものとは別のところの組織論理が勝ってしまって結論が出ないということなのです。これって今の日本に当てはまるのではないかと思えるのですよね。私たちは小さな鳥取県ですから、むしろそうしたことに対するアンチテーゼを出していけるんだらと思うんです。組織をもっともっとオープンにして、境界をつなげていく。ちょうど皆さんが一番若々しい人材ですから、最も住民の皆さんだとか現場の方々に接する機会が多いところだと思います。皆さんがこの県庁とか、県庁に関連した組織の目であり耳であり口であるのですよね。形態関係、バウンダリーコミュニケーションというのですけれども、そうした境界のところを皆さんがまさになる。これは連結ピンのような、そういう重要な役割を果たすといわれています。そうした皆さん、是非この県庁の中の組織で、そうした新しい役割を果たしてもらいたいと思います。特にその中で大切なのはコミュニケーションの問題でありまして、正直申し上げてこういうコミュニケーションが下手な人間がどんどん社会の中で増えているように思います。鳥取県庁はその逆をいきいたいと思っているのです。小さな県であり小さな組織ですから、その意味でいろんなコミュニケーションを上手にとれるようなことにしてもらいたいと思っています。今ちょうど挨拶運動を県なんかでもやっていますけれども、当たり前のことだと思われるかもしれませんが、結構これ県外で驚かれるのですよね。鳥取県のほうに電話をすると「ありがとうございます」とか言ってまず答えが返ってくる。「すごいね」とよく言われるのです。この辺がやはりコミュニケーションの取り方だと思うのです。ただ放っておきますと、どんどん役所というのは元に戻っちゃうんです。また、そうした挨拶すら忘れてしまって、寡黙のような状態にもなるのです。私なんか最初に4年前当選して県庁に入って来たら、歩いていますと横に逃げていくという、信じられないと思うのですけれども、それって悪いことでしょうか。そういうことってやっぱり得てして起こるのです。県庁とかこういう役所という組織は、もっと自然な社会でありたいと思います。そしてイノベーションを起こして、改善運動をやって、これは今我々も始めたところがあります。先ほど米子児相の堀江さんが、なかなかケースが多くて大変だということのお話をおっしゃいました。是非、こういうふうにしたらもっとうまく組織がまわるなとか、いろんな改善、提案もいただければと思いますし、もし人材配置に問題があるのであれば、それもまた適正化していけばいいわけでありまして、みんなで組織をもっともっと元気にして、イノベーションを図っていくべきではないかなと考えております。鳥取は小さな県ではありますが、偉大な挑戦者になり得ると思うんです。地方分権というのは、そもそも豊かな住民生活を実現しようというところから始まっているわけでありまして。と申しますのも、最初に地方分権という言葉ができたのは、これは臨調といわれる、かなり昔の行政改革の理論から生まれたんです。そうとう行政を小さくして、ダウンサイジングしていきます。財政を緊縮していきますと、当然ながらサービスが低下するだろう。しかし、地域で必要なことを優先順位をつけてやっていけば、その中

で最適化を図ることができる。一番良い結果を、乏しい資源の中でも出せるだろう。それを、住民が参画をして、地域の組織の県庁の効率を高めて、それで実現していこうではないかというのが地方分権の原点なんですね。そういう意味で豊かな住民生活を実現するために、鳥取からそうした分権型社会をつくっていきたくと思います。ただ、残念ながら、大変な地域間競争があります。例えば私たち鳥取県と東京都と互角に張り合えるかどうか。大変ですよ。だけど勝機はあると思います。例えば、県民は34.5%が年間何回かのボランティア活動に参加しているんです。この数字は全国一なんです。2位が島根県とか滋賀県なんですよ。トップは鳥取県なんです。意外に思われるかもしれませんが、そういう県民性が我々にとっては、プラスに働き得ると思うんです。「みんなでやらいや。みんなでやろうじゃないか」そういうことで、新しいムーブメントを県民運動的に起こしていけば、私たちにだって東京や大阪に勝つチャンスはあると思うんです。例えば学者さんとか、あるいはお医者さんとか、企業からとか、いろんな人たちが皆さんの身の周りにはいっぱいいますよね。それも同じコミュニティの中において、顔が結構お互い分かりあえるんです。もし、学生時代東京で暮らして、大阪で暮らしたかったら、思い起こしてもらいたいと思うんですが、この近所にどういいう経済界の友人がいたかな、そいつとしゃべったことあるかなと思いき出していただきたいと思うんですけど、たぶん皆無だと思えます。都会というのはそういうものですよ。全部断されています。私たちは総当たり戦でやることのできる。この辺も活かしていけば、地域間競争に打ち勝っていくことも可能かもしれません。パラダイムシフトをどんどんと今起こしていくわけがありますが、従来とは違って、静脈型といわれるような、そういう価値観が隆盛になってきています。例えば環境ですね。10年、20年前であれば「環境のことをなんぼやったって、そんなもの銭にならん」というふうに言われていました。しかし、今は時代は変わってきていますよね。あるいはその文化だとか、芸術だとか、例えば漫画ということもそうです。漫画なんか読んでいたって、やったって何にもならんよといいながら、鳥取県が一生懸命境港で漫画のまちづくりやったら、今や370万人の人が年間やって来るようになりました。どんどんと変わってきています。自然が豊かだというのは、田舎だ、言ってもしょうがないというイメージだったものが、今移住の対象になっていますよね。農林水産業、これはとって就職先で考えられないというところだったんですけど、今もお話をしていたんですが、千葉からやってきた若い男性が船岡のほうで里づくりに励みはじめたという話を今聞かされたばかりですけど、そういうのが本当に増えてきているんです。今、価値観が変わってきて、ライフスタイルが変わってきて、鳥取というのが経済的にも地域経済を発展させる上でも評価される要素が本当に出てきていると私は思うんですね。そうしたパラダイムシフトを活かして、今まで時代から見たら随分遅れたところを走っていると思われていたんですけど、私たちは実はひとつの校庭を走っていた。学校の庭を走っていた。気がついてみると、1周遅れだったと思っていた自分が、いつしかトップを走っているような、そんな今光景になってきている。そんなのが今の鳥取の状況じゃないかと思うんです。ですから、チャンスが出て来ていると思うんです。小さくたってそういう挑戦はできるんじゃないかなと思います。そんな中で必要なのは、やっぱり人材だと思うんですよ。よく言われるんですけども、鳥取県のような、いわば都市部と地方部という比較でいいますと、地方のほうに行くと、大きな企業がなかなかないところでありまして、やっぱり県庁の影響力というのは大きいんですよ。その意味で皆さんの行動に対して結構多くの方が注目しているんです。それから皆さんが「これやろうぜ」って言ったら、そしたらついて来る人たちもそこそこいるんです。そういうような中で、これから一生をかけて鳥取を変えていってほしいなと思うんです。そのために是非発言して、行動する、そういう職員になってもらいたいなと思います。私は名物の職員であってほしいなと思っています。「ああ、県庁に行ったら堀江さんという人がいたな」とか、そのようなことが本当にあるんですよ。いろんな、おもしろいほど変わっていく職員の方も結構おられまして、例えば、中には平気で関西の経済界のところも、本当に顔見知りになって飲み友達になっちゃうようなそういう幹部職員がいたり、それから若手の中でもどんどん食い込んでいって、果てはJTBの社長まで友達にしちゃった若手の西部の職員がいたり、そういうのって本当にあるんですよ。そういう職員になってみたいと皆さんも内心思っておられると思う。是非そうしたことを目指してもらいたいなと思うんです。私は応援します。そうして、そういう

職員の皆さんがそれぞれに、さっきの文殊の知恵ではないですけども、一番良いところをそれぞれ持っていれば、みんなで自分の良いところを組み合わせれば、全国トップレベルの県庁に私たちだってなれると思うんです。是非、皆さんと一緒に県民のための新しい時代、鳥取の新時代を切り開いていきたいなと思います。実はちょうど、たった今、エンジン01という新しいプロジェクトが動き始めたところとして、この近くの知事公邸で記者会見をしてきたんです。そのメンバーはどんな人かといいますと、トップの方は大会の委員長、これは3月の23日から鳥取市内で開かれるんですけども、大会委員長をされるのは和田秀樹さんという精神科医で、よく本書いたりテレビに出たりされる方です。それから、実行委員長は林真理子さん、作家の林真理子さん。それから、その幹事長をされておられるのは三枝成彰さん。作曲家でよくテレビに出ておられる方です。そうした、そうそうたるメンバーが鳥取から新しい動きを起こそうではないかという、そういうイベントをやろうと立ち上がって、やってくださいまして、3月にいよいよ行われることになりました。ミュージシャンだと布袋さんとか、そういう方々も来られるんじゃないかなと思います。そういう皆さんが鳥取に注目する中で、このたび新しいコピーライトを考えられたその岡田さんという方がコピーライター考えられたのは、「鳥取から何通りもの先取りを」、先取りというのは鳥取の「取」とひっかけてあるわけでありましてけれども、何通りもの先取りをやったらいいんじゃないんだろうかと、それで岡田さん記者会見で言っていましたけれども、「何通りにしましょうか」と。皆さんも考えられればお分かりいただけると思いますけど、これは10通りしかない。「10通りであれば、とうとおり（鳥取）になる」こんなつまらないことを言っていましたけども、そういうようなわけでありまして、鳥取から先取りを起こしていく。例えば「あいサポート」なんていう鳥取発の障がい者をサポートする運動が今や鳥根県に広がり、広島県までいこうとしています。全国へ向けて広がろうとしている。鳥取からはじまった芝生化の鳥取方式がどんどん今全国にも広がっていて、トルシエ監督だとかも熱心な信奉者になっている。いろいろと鳥取からはじめるということはあるだろうと思うんです。小さな県ではありますがけれども、県の西部に粟島神社という神社がありますよね。粟島神社は、これは少彦名命の命を祀る神社であります。大国主の命と一緒に国づくりをした知恵者でございますけれども、小さい人だったんです。小さい人の知恵でこの日本という国がその根本からつくられてきたという、そんな神話の故郷が鳥取なんです。皆さんの力で是非、鳥取からこの国を、そして県民の皆さんの生活を変えていければと思います。県庁での皆さんの旅立ちに心からエールを送りまして、私のほうからのメッセージに代えさせていただきます。本当にどうもありがとうございました。（以上）